

コミュニケーション能力を高めるための英語教育の在り方

- 中学校第1学年英語科カリキュラム試案における九つのユニットの実際 -

吉岡 健一郎

学習指導要領が改訂され、平成23年度から小学校第5・6学年において「外国語活動」が導入されることになった。このように、小学校英語がさらに推進される中、中学校英語の在り方について検討した。

実践授業では、相手に自分の感情や意思を表現したり、相手の意向を尋ねたりするなどのコミュニケーションを体験することができるような活動を取り入れ、コミュニケーション能力を高め、伝えたいことを相手に伝えることができるような生徒の姿をめざした。

今年度は、昨年度提示したカリキュラム試案をより一般化できるような、言語機能を軸とし、英語活動と連携した中学校第1学年のカリキュラム試案（九つのユニット）について報告する。

第1章 中学校英語に求められているもの

第1節 コミュニケーション能力を

高めるために

平成20年1月の中央教育審議会答申を踏まえた中学校外国語科の改訂の四つの基本方針では、自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」や、コミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力、4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力の育成などが求められている。また、中学校学習指導要領の外国語科の目標に掲げられている「コミュニケーション能力」を、「英語を使って相手を動かす力」「使われた英語に対して自分が動く力」ととらえ、実際の場面に近いコミュニケーションを体験させたいと考えた。

第2節 英語教育の現状

国立教育政策研究所は、平成21年3月に「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究」成果報告書を刊行した。そこでは、「あなたは、英語が使えるようになりたいですか。」という項目に対し、第5・6学年とも、およそ8割の子どもたちが「そう思う」と回答していたことが報告されている。

また、平成20年度本市中学校「学力定着調査」報告（中学校英語）からは、指導上の課題として、次の3点が示されている。

基本的な語彙や文構造の確実な定着
英語を聞いて適切な応答ができる力の向上
身近な場面における出来事や体験したこと
について英語で表現できる力の育成

これらの課題から、次のような手だてが必要であると考えた。

繰り返し指導の必要性

身近な場面設定の重要性

指導者はもちろん、生徒も様々な場面で、英語を使用する活動の工夫

第2章 カリキュラム試案の作成に当たって

第1節 言語機能とタスクを中心に

中学校第1学年のカリキュラム試案の作成に当たって、「言語機能」と「タスク」を重視した。

そこで、英語ノートと中学校第1学年の英語科教科書について、言語機能の配分や配列を比較した。また、「使用表現」の比較を通して、言語機能の扱い方について検討した。

これらを踏まえて、カリキュラム試案では、六つに分類されている言語機能の中から、特に、「意見・判断・考え等を表現し、見つけだす」言語機能を多く扱う必要があると考えた。この言語機能は、自分の好み、嫌悪、好き嫌いについて問う、喜び、うれしさ、欲求、願望を表す具体表現を含むものである。生徒が、自分の好みや思いを相手に伝える活動を通して、自分の伝えたいことが相手に伝わったときの喜びを感じることは、自信をもつことにつながり、次の学習の意欲にもつながると考えた。この言語機能は、カリキュラム試案の九つあるユニットの1から8に、年間を通し設定している。また、英語ノートでも多く扱われ学習している言語機能でもある。

英語の授業を考えていく上で、文法問題を数多く解いたり、教科書に出てくる構文を暗記したりすることは大切なことである。しかし、このような取組だけではなく、授業においては、実際の場面に近いコミュニケーションを工夫して取り入れなければならない。それを生徒が体験していくことで、その場に応じたコミュニケーションができ

るようになるからである。このことを可能にするのがタスクであると考え、活動の中心に据えた。

第2節 カリキュラム試案の運用に当たって一つのユニットは、プレタスク・タスク・ポストタスクで構成し、一連の流れとして取り扱う。

プログラムは、目標、言語材料、教材、プレタスク活動例、ポストタスク活動例の五つの要素から成り立っている。

また、教科書は、カリキュラム試案の複数のユニットを終えた後に扱ったり、一つのユニットが終わった後に扱ったりしながら、関連しているものを、まとめて扱うことにした。カリキュラム試案で70時間、教科書で35時間の時数を配分した。

第3章 実践授業を通して

第1節 UNIT1「伝えよう！好きなもの・

嫌いなもの」での実践

UNIT1では、「意見・判断・考え等を表現し、見つけだす」「さまざまなことを行わせる」「社交的活動をする」「コミュニケーションの修復」といった言語機能を学習する。

タスクは、友だち同士であいさつをして、自分の好きなものや嫌いなものを伝えることである。聞き取った情報は、メモにとることにした。このユニットでは、4技能を意識して授業に取り組んだ。

生徒は、自分の好き嫌いなどを伝える紹介文を、積極的にクラスの友だちに伝えることができた。

第2節 UNIT2「ネームカードを

交換しよう」での実践

UNIT2では、「意見・判断・考え等を表現し、見つけだす」「さまざまなことを行わせる」「社交的活動をする」「コミュニケーションの修復」といった言語機能を学習する。

タスクは、あいさつをしたり、自己紹介をしたりしながら、自分たちで作成したネームカードを交換することである。このユニットでは、クラスルームイングリッシュや生徒への指示や説明など、英語を意識して使用しながら授業に取り組んだ。

まず、生徒は、それぞれのオリジナルネームカードを作成した。次に、自己紹介をしながら、カードを交換した。



図1 自己紹介をし合っている様子

第3節 UNIT3「友だちのことを

知ろう！」での実践

UNIT3では、「事実に関する情報を伝え、求める」「意見・判断・考え等を表現し、見つけだす」「さまざまなことを行わせる」「社交的活動をする」といった言語機能を学習する。

タスクは、八つの疑問文を用いて、友だちに英語でインタビュー

を行い、友だちのことを知ることである。このユニットでは、繰り返しの指導を意識して授業に取り組んだ。



図2 友だちにインタビューをしている様子

第4節 UNIT7「友だちを誘って

ご飯を食べよう」での実践

UNIT7では、「事実に関する情報を伝え、求める」「意見・判断・考え等を表現し、見つけだす」「さまざまなことを行わせる」といった言語機能を学習する。

タスクは、ハンバーガーショップで買い物をする場面を想定しながら、注文をしたり、店員になって注文を聞いたりすることである。このユニットでは、身近な場面を意識しながら授業に取り組んだ。

生徒は、ペアで協力して、オリジナルの文が入った文を何度も音読練習した。各ペアは、練習の成果を発揮して、活動を進めることができた。

第4章 英語教育の小中連携をめざして

第1節 カリキュラム試案の妥当性

実践授業で、生徒は、友だち同士で伝えたいことを伝え合ったり、ペアで協力して発表をしたりするなど、意欲的に活動に取り組んでいた。

また、指導者は、授業を振り返り、身近な場面を設定したことなどから、自分のことを伝えるだけでなく、なんとか相手の伝えたいことを聞き取ろうと、耳を傾けるなど、生徒に積極的な様子が見られたと述べている。

第2節 よりよい連携をめざして

小中連携の必要性が求められている中、小学校、中学校の双方の指導者は、少なくとも同じ中学校区の小学校と中学校、小学校と小学校とが、今まで以上に学習内容、学習活動、児童や生徒の実態についての情報交換を行い、取組を進めていく必要がある